源氏物語❶

A・ウェイリー版

The Tale of Genji　Lady Murasaki's Masterpiece

ためしよみ版

目次 CONTENTS

――あなたでしたの、王子さま、と彼女は言いました。
ずいぶんお待ちしましたわ。

「眠りの森の美女」より

桐壺 きりつぼ
キリツボ／Kiritsubo ❦ 7

帚木 ははきぎ
ブルーム・ツリー／The Broom-Tree ❦ 43

空蟬 うつせみ
ウツセミ／Utsusemi ❦ 107

夕顔 ゆうがお
イヴニング・フェイス／Yugao ❦ 125

若紫 わかむらさき
ムラサキ／Murasaki ❦ 195

末摘花 すえつむはな
サフラン姫／The Saffron-Flower ❦ 267

紅葉賀 もみじのが
紅葉フェスティヴァル／The Festival of Red Leaves ❦ 315

花宴 はなのえん
フラワー・フィースト／The Flower Feast ❦ 359

葵 あおい
アオイ／Aoi ❦ 379

賢木 さかき
セイクリッド・ツリー／The Sacred Tree ❦ 447

花散里 はなちるさと
オレンジの花散るヴィレッジ／The Village of Falling Flowers ❦ 525

須磨 すま
エグザイル・アット・スマ／Exile at Suma ❦ 535

明石 あかし
アカシ／Akashi ❦ 599

訳者あとがき　毬矢まりえ

本書は、*The Tale of Genji* (1925), *The Sacred Tree* (1926), *A Wreath of Cloud* (1927), *Blue Trousers* (1928), *The Lady of the Boat* (1932), *The Bridge of Dreams* (1933)(George Allen&Unwin) の初版の全訳である。

時代も距離も遠く離れた平安朝日本の物語を訳すにあたり、ウェイリーはいくつかの方針を使い分けている。人物や事物の名前については音訳されている場合と、意味から訳されている場合がある。また位階や宮中の儀式、宗教行事などはヨーロッパの宮廷やキリスト教に関連するものに置き換えているところもある。それらは適宜、読みやすさを念頭に、ルビを添えるなどした。

ウェイリーの付した原注は▼印で示し、必要に応じて〔　〕で訳注を添えて各帖の末尾に訳出した。訳注は［1］などとして、同じく各帖の末尾に記した。原文、ならびに各帖の扉裏に付した人物表は、主として岩波文庫『源氏物語』全九冊新校注版（柳井滋ほか校注、二〇一七年～）を参照した。

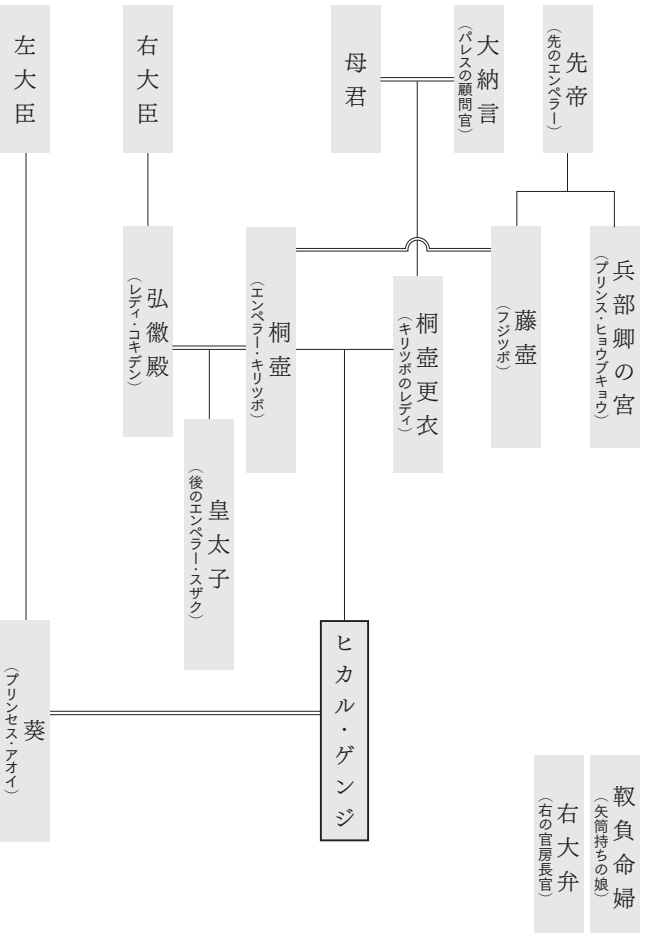
「源氏物語」を歌物語と捉えたウェイリーは、本文中にさまざまな工夫を凝らして和歌を訳出している。本書ではウェイリーの英訳を訳し戻すとともに、藤井貞和監修による表記で原文を添えた。

各帖のタイトルは一般的な巻名にし、ウェイリーの英訳とその日本語訳を併記した。

桐壺　きりつぼ

Kiritsubo

キリツボ



いつの時代のことでしたか、あるエンペラーの宮廷での物語でございます。[1]

ワード更ローブの衣レディ、ベッド女チェンバーの御レディなど、後宮にはそれはそれは数多くの女性が仕えておりました。そのなかに一人、エンペラーのご寵愛を一身に集める女性がいました。その人は侍女の中では低い身分でしたので、成り上がり女とさげすまれ、妬まれます。あんな女に夢をつぶされるとは。わたしこそと大貴婦人たちの誰もが心を燃やしていたのです。

ましてや同じような身分だった仲間の侍女たちは、一躍、引き立てられた彼女を許せません。揺るぎない寵姫の地位を得たとはいえ、彼女は妬み、そねみに曝されます。心痛で憔悴し、やがて里に下がっていることが多くなりました。病気がちで鬱ぎこむ彼女に、エンペラーの熱は冷めるどころか、ますます彼女に溺れ、たしなめる周囲の声にもいっさい耳を貸しません。そのことは次第に国中の噂となっていきました。

＊ためしよみ版

側近の大貴族や廷臣たちさえ、ご寵愛がすぎる、と眉を顰（ひそ）めます。海の向こうの国での政変や暴動もはじまりは、こんなことからだったなどとひそひそ囁（ささや）き合うのでした。国民からも不満が出はじめます。ミン・ホワン皇帝[2]の恋人、ヤン・クウェイフェイ（楊貴妃）のことをいう者も出てくる始末。けれど不満が燻（くすぶ）りつつも、エンペラーの威光と寵愛は動かしがたく、表立って彼女を叩く人はいませんでした。

彼女の父君はパレスの顧問官（ダイナゴン）でしたが、すでに亡くなっていました。ひところはかなりの地位にあった人物。母君もその誇りを胸に、両親も揃い、栄華を極める令嬢たちにも負けぬよう、苦しい日々の中でもできる限りのことをして育てたのです。後ろ盾となる立派な後見人がいれば、どれだけ助けになったでしょう。けれど残念ながら、母君も孤立無援。なにかあっても彼女には頼れる人も相談する人もいないのです。心細い限りでした。

ともあれ、かの娘の話に戻りましょう。

やがて彼女は、幼いプリンスを生み落としました。前世から、きっと深い繋がりがあったのでしょう。国中を見渡しても比べるもののない、輝くような男御子です。エンペラー・桐壺（キリツボ）は、子どものお目通りを、今か今かと待ちかねておられましたが、[3]ついに宮中でのご対面のときが来ました。その子は噂に違わぬ美しさです。

エンペラーの第一（ファースト）プリンスは、右大臣の娘、レディ・弘徽殿（コキデン）の皇子。ゆくゆくは皇太子になると目され、みなにかしずかれていました。が残念ながら、このたびご誕生の皇子ほどの器量ではありません。加えてエンペラーの彼女へのあの絶大なるご寵愛。エンペラーは心中、このプリンスこそ我が跡継ぎ、と思うのです。けれども無念なことに、どれほど愛そうとも、どれほどその人にグレートレディの気品があろうとも、彼女はパレスの皇帝に仕えるほかのレディたちより、低い身分なのです。それですのにエンペラーは、饗宴（きょうえん）のときだけでなく、重要な国務のときもいつもお側に置きますからたいへんな懸念を呼ぶのです。朝お目覚めになっても彼女を離さず、部屋にも帰しません。いつの間にか世に言う「片時も離れぬ寵姫」となっていたのです。

これを見たコキデンは、このままではあのプリンスが次代の皇帝の控えるイースタン・パレスに上げられ[4]皇太子になってしまう、なんとかせねば、と焦ります。とはいえ自分の優位は変わらないはず。これまで、自分こそ誠実に愛され、皇子を何人も生んできたのです。エンペラー・キリツボのほうでは、コキデンが責めたてなければ、いまのままで何の不足もないはずでした。

こうして寵姫は、彼女を貶めようとする人たちに囲まれ、エンペラーのご寵愛を受けて幸せであるはずなのに、辛いことばかりなのでした。

彼女の住まいはキリツボと呼ばれる、本殿から離れたウイングにありました。です

から、皇帝の部屋へお呼びがあると、他のレディたちのドアの前を、幾つも通らなくてはなりません。これは女たちの神経を逆なでします。それも頻繁な行き来。妨害して困らせようと、渡り橋や廊下のあちこちに仕掛けをします。また不浄なものが撒いてあって、お付きの侍女のドレスの裾が汚されてしまうこともありました。[▼5] あるときなど、廊下のドアに鍵が掛かって閉め出され、お気の毒なことに前にも後ろにも進めなくなってしまったのです。エンペラーは、寵姫がこのような毎日のいじめに、神経をすり減らしているのを見かね、近くの後涼殿（コウロウデン）へ引っ越させました。けれどもそのことでワードローブのレディのチーフが他の部屋に追いやられたのです。事態は良くなるどころか、怒りに燃える新たな敵を、もう一人、生んだだけでした。

さて、ヤング・プリンスは三歳になりました。

無事の成長を祝うズボンの儀式、袴着[1]は、皇太子にも負けないほど盛大に行われました。豪華な贈りものが、皇室の宝物殿（トレジャリー）や納（トリビュート）殿（ハウス）から溢れ出ました。これまた多くの非難を浴びたものの、その敵意はプリンス本人には及びません。ますます輝く美しさ、愛らしい性格。会う人を、ことごとく魅了したのです。世慣れた気むずかしい者であっても、これほどの皇子が頽廃の末世に誕生したとは、と感嘆せずにはいられませんでした。

その年の夏、キリツボのレディは加減が悪くなりました。しばらく里へ帰らせてください、とお願いするのですが、聞き届けられません。そのまま一年が過ぎました。何度願い出ても、エンペラーは「もうしばらく、様子を見よう」とおっしゃるのみ。

日に日にレディの容体は悪化します。ついに五、六日ですっかり衰弱しますので、母君は、どうか娘をお帰しください、とパレスに涙ながらに訴え出ました。キリツボのレディは、この期（ご）に及んでもまたいじめられ、恥をかかされるのではないかと不安で、秘かにパレスを出る決心をしました。幼いプリンスは宮中に置いてゆかなければなりません。

いよいよ彼女を里に帰さねばならない、エンペラーも覚悟を決めました。

けれども、たったひと言でもいい、別れの言葉を交わしたい、と彼女の枕辺に駆けつけます。

彼女は変わらず美しく魅惑的ですが、頬はこけ落ち、青ざめていました。なにも言わず、エンペラー・キリツボをその瞳でじっと見つめます。生きているのだろうか。命の光は、はかなく消えゆきそうです。

思わずエンペラーはわれを忘れ、彼女を胸に抱くと、いくつもの愛しい名前で呼びかけ、涙を雨と降らせます。が、何も返事はありません。もうほとんど何も見えず聞こえず、朦朧（もうろう）として、自分がどこにいるのかもわからぬ様子です。エンペラーは茫然

とします。

とり乱したまま、馬車を言いつけます。しかし、彼女を馬車へ乗せようとしても離さず、抱き寄せては言うのです。

「最期の旅はきっと一緒に、と誓い合ったではないか。どうして、わたしひとりを残して、逝ってしまうのだ」

彼女の耳にも、これが届きました。

「ああ……、とうとう待ち望んだ最期のとき……！　でも、ひとりで逝かねばならないなんて。それならば、もっと生きていたかった……」

限りとてわかるゝ道の悲しきに、いかまほしきは　命なりけり

息も絶え絶えに、レディは声を絞り出します。苦しみと痛みが、ひと言ひと言に籠もります。なにがあっても最後まで見守ろうと、エンペラー・キリツボは思っていました。しかし、里では祈祷をあげる僧侶が待っていますから、日が落ちる前に帰さねばなりません。胸引き裂かれる思いで、彼女を見送るのでした。

エンペラーは眠ろうとしますが、息苦しくて目をつぶることもできません。一晩中、メッセンジャーが行き来しますが、一向によい知らせはないのです。

真夜中過ぎでした。パレスからの使者がキリツボのレディ邸に着くと、すすり泣きと悲しみの叫び声。

「レディはいまし方、息を引き取られました」と告げられたのです。

使者はパレスに戻り、エンペラーにお伝えしますが、なにも耳に入らぬよう。身じろぎもなさいません。

エンペラーは幼いプリンスを可愛がり、それまで手元に置いてきました。しかし、こうなってはパレスから出した方が安全であろう、と思います。一方のプリンスは、なにが起きたのかわかりません。ただ、召使いたちが身を捩(よじ)って嘆き、エンペラーも涙を流していますから、なにかとても恐ろしいことがあったんだ、と思います。ちょっと離れているだけでも寂しいもの。それがいままで見たこともないほど、誰もが嘆き、泣き崩れているのです。これはきっとたいへんなお別れなのだ、と幼な心に思うのでした。

葬儀のときが来ました。

キリツボ姫の母君が、自分も煙となって娘と一緒に天に昇りたい、と声をあげて泣いています。彼女はパレスの侍女たちと馬車で来ていたのです。壮麗な葬儀は愛宕(アタゴ)で行われました。自分が見つめている限り、この娘は死なない、そう信じる母の深い愛

情に、誰もが胸締めつけられる思いです。
積み薪に火が付けられた、そのとき。ついに、これは亡骸なのだ、と母君も悟ったようです。なんとか口をきこうとしますが、よろめいて馬車から転げ落ちんばかり。乗り合わせた侍女たちは顔を見合わせ、「亡くなられた、とやっとおわかりのようね」と言い合うのでした。
亡きレディを三位に引き上げる、との勅令が届きました。長々とお達しが読み上げられたのは、彼女の棺の横。悲しい光景です。エンペラーは、もっと早くウェイティングのレディの地位を与えるべきであった、と悔やみ、せめてもと一位上げられたのでした。この栄誉にも不満が出ますが、それほど頑なでない人は、たしかに彼女は類い稀な美女であったと懐かしみます。またある人は、彼女は優しく淑やかだった、と言いますし、ついには、あれほど愛すべき女性を妬むなど恥ずかしいことだった、エンペラーがほかを差し置いて彼女を贔屓したからであって、さもなければ、いじめられることもなかっただろうに、と言い出す者も現われました。
エンペラー・キリツボの命で、七週間の喪が厳密に守られました。喪が明けても、エンペラーは後宮のレディを誰も、お側に召しません。夜を日に継いで、涙にくれておられますので、お仕えする人びとも悲しんでいました。
レディ・コキデンやとりまきのレディたちは、いまだに容赦なく言い募ります。

「陛下も愚かしいこと。あの女が死んだと思ったら、今度は、思い出にとり憑かれてしまって」
皇帝はコキデンの第一プリンスにも、時折はお会いになります。しかしこれは喪った方の忘れ形見を思い出させるばかり。ご自分の乳母など、信頼のおける使者を送っては、皇子の様子を報告させるのでした。
秋分のころとなり、夕暮れの空気が肌にひんやりと触れます。思い出が一挙に胸に押し寄せ、エンペラー・キリツボはたまらず、矢筒持ちの娘を亡き人の邸に使いに出しました。
美しい月夜です。エンペラーは使いを送った後、しばし夜の闇に見入っておられました。このような晩にはいつも、音楽を演奏させたものです。彼女のやわらかな吐息が、音楽と甘く溶け合い、その顔も、姿も、何もかもがこの世のものとは思われませんでした。「ものみな、闇に沈み、夢のよう」[2]という詩の一節が頭を過ぎり、ほんの一瞬でもいい、夜毎のあの夢のときよ、帰ってきておくれ、と切望するのでした。
矢筒持ちの娘がお邸に着き、門を入ると、異様な光景が広がっています。老婦人はもう何年も前に未亡人になり、この地所の管理は、娘のキリツボのレディに頼っていたのです。彼女亡きいま、母君は寄る年波と悲しみに沈み、邸の手入れもままなりま

せん。草は伸び荒れ放題。そこに荒々しい野分が吹きつけ、荒涼としています。蓬が生い茂り、月の光を通すのみでした。

彼女は玄関で馬車を降りました。はじめ母君は、使者に答えるべき言葉が何も見つかりませんでしたが、ようやくこう言いました。

「ああ、いたずらにこの世に長居してしまいました！　あなたのような尊い使者が、荒れ果てた我が家へ、露葎を踏み分けて来られるとは。なんと恥ずかしいこと」

こう言って泣き崩れます。矢筒持ちの娘は答えました。

「こちらを訪ねたパレスからの使いが、ここのご様子に胸が張り裂けそうでした、そう陛下にお伝えしていました。マダム、わたしも同じ気持ちです」

少し躊躇ってから、エンペラーのメッセージを伝えます。

「「この悪夢からの出口はないかと、心の闇のなかを手探りしてきた。だが、どこにも抜け出す道は見つからぬ。思い出を語り合える相手も、ここには誰もいないのだ。密かに我がパレスへ来られぬだろうか。若いプリンスが、荒れ果てた邸にさびしく暮らすのも、良からぬこと。ぜひ来てください」

このようなこと、またそのほか種々を、心乱れ、ため息まじりにおっしゃるのです。それでも、なんとか悲しみを押し隠そうとするお姿は痛ましく、終わりまで聞かずここへ参りました。これが陛下からのお手紙です」

「わたしは目が悪くて、よく見えないのです。灯りにかざしましょう」

手紙にはこうありました。

「「ときが流れれば、少しは悲しみも薄らぎ、拭い去れるものかと思っていた。しかし違ったのだ。日が経ち、月を経るほどに、ますます我が人生は無意味で、耐え難いものに思われる。我が子はどうしているのか、そればかりが気に掛かる。亡きレディと二人で、あの皇子の成長を見られると思っていたのだ。忘れ形見のプリンスを連れて来て、ここで育ててはくれまいか」

このような手紙でした。そのほかいろいろご指示があり、歌も添えられていました。

「宮城野の荒野に吹く風は、冷たい露を結ぶ。その風音を聞くわたしは、か細きライラックの花枝を思いやるのだ」

宮城野の露吹き結ぶ風の音に、小萩が本を思ひこそ　やれ

それは幼いプリンスを詩に詠んだものでした。母君は、涙で手紙を読み通せません。ようやく口を開きました。

（ためしよみ　終）

［原注］

▼1 第一帖は、どうか寛大な気持ちで読んで頂きたい。作者紫式部はまだ、先人たちの未熟な作品の影響のもと、宮中年代記（クロニクル）と、それまでにあったおとぎ話（フェアリー・テール）が混在したスタイルで書いている。

▼2 中国の唐王朝の有名な皇帝（六八五―七六二年）。

▼3 生後、数週間経たなければ、皇帝にお披露目できないことになっていた。

▼4 つまり、皇太子となること。

▼5 レディ・キリツボはもちろん、担い駕籠に乗っていた〔つまり彼女のドレスは汚れなかった。建物と建物を結ぶ渡殿、架け橋を駕籠に乗って移動したと想像したのか〕。

［訳注］

ウェイリーはこの物語にどことも知れぬエキゾチックな雰囲気を与えている。当時の読者は大英帝国ヴィクトリア王朝の華やかなりし宮廷や貴族文化、また「千夜一夜物語」を重ね合わせたことだろう。

［1］ 袴着という男子成人式に当たる儀式を「ズボンの儀式」と訳している。女子の裳着は「スカートの儀式」。服装などのファッション用語についてもウェイリーは当時の読者にわかりやすいよう、工夫を凝らしている。女性はドレスやガウンを纏い、サッシュを締める。裳はスカート、小袿や袍はチュニック、袴はパンツ、指貫はバギーパンツなど、イメージの近いものを柔軟に当てている。

［2］「むばたまの闇のうつつはさだかなる夢にいくかもまさらざりけり」（古今集・恋三・読人しらず）。

［3］ 宮城野とは宮中のこと。ウェイリーはミヤギをタカギと誤っている。このように誤りと思われるもの、また誤りではないが一般的でない読みに関しては、全巻を通じ適宜、訳者の判断で通説に従った。また「ムーアに吹く風」としたのは「野分」すなわち二百十日頃の台風の古称。「ムーア」という語を選んだウェイリーの脳裏にはブロンテの『嵐が丘』のイメージがあったのだろうか。

［4］「いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はむこともはづかし」（古今集・六帖五）。「高砂の松」とは雄株と雌株が寄り添い生えた老い松、長寿と夫婦の愛情を象徴する。

［5］ 後撰集・藤原兼輔「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」を踏まえる。

ウェイリー版源氏物語とは

いまからおよそ一〇〇年前、大英博物館に勤めていた一人の天才が、独力で源氏物語を訳し切りました。その驚異的な訳業を世に送り出した天才の名はアーサー・ウェイリー。

濃紺の布表紙に金の背文字を押した「*The Tale of Genji*」第一巻。一九二五年、ロンドン。ヴァージニア・ウルフが『灯台へ』を構想し、T・S・エリオットが近代詩の革新を企てる。そしてマルセル・プルーストの畢生の大作『失われた時を求めて』が英訳されて届けられる。そんな近代文学から現代文学へ、大きな変化の胎動が始まっている時代でした。

独学で中国語をマスターし、白居易らを翻訳紹介して注目されていたウェイリーが、あらたに日本語を習得し刊行した源氏物語はたちまち読書子の話題をさらいます。「日本の一大傑作」「黄金時代の日本から来た最高級の文学」などと大絶賛され、ベストセラーになったのです。その生き生きと古びない喜怒哀楽、大勢の人物がそれぞれの人生を生きる広大なストーリー。作者紫式部は尊敬を込めてボッカッチョ、フィールディング、オースティン、果てはシェイクスピアにも比されたといいます。イギリスでの源氏物語熱はすぐにヨーロッパから世界へと広まります。ウェイリーの訳はスペイン語やイタリア語の底本となり、大西洋を超えてアメリカでも大いに話題となったのです。

ドナルド・キーンさんは、ある日ふと、ニューヨークの古本屋で購入したウェイリー版源氏物語との出会いが、自分の生涯を変えてしまったといいます。

ウェイリー版源氏物語の魅力にはなんといっても、英語としての素晴らしさ、美しさが挙げられます。光源氏の生き生きとしたキャラクターと、巧みに展開するストーリーが読者の心を掴んで離さない、源氏物語の魅力のエッセンスを凝縮しているのです。

ウェイリー版源氏物語、実は精確な翻訳ではないということもよく言われます。いろいろな解釈の誤りがあるのはよく知られていますし、原文にはない説明を補っているところも見られます。そして（理由は定かではありませんが）、第三十八帖「鈴虫」をまるごと省略しています。

わずかな註釈本を頼りにするしかなかったことを思えば、それでも驚くべきこと。そして物語の魅力は損なわれていません。ウェイリーの翻訳は、原文を繰り返し読んで頭に入れ、そのあとで原文を離れて英文を書き下ろすというスタイルでした。それゆえにかえって、源氏物語の大切な部分は伝えられたのかもしれません。

ウェイリー版を訳す、この大きな企画が始まるまでのお話は、ぜひ本書の訳者あとがきをお読みください。日本語へのバックトランスレーション（再翻訳、逆翻訳）にあたっては、ウェイリー版の魅力を伝えることを最優先しました。びっくりするほど読みやすく、ほろっとしたりイラっとしたり、昔のひとを思い出したり。こんなにも源氏物語が心揺さぶられる物語だったとは、そう感じることでしょう。

数ある現代語訳にくわえて、新しい校訂版の刊行が始まり、斬新な現代語訳も登場した二〇一七年。このときならぬ源氏ブームに、究極のヴァージョンをお送りします。ウェイリーという天才のプリズムを通した源氏物語、世界中の人びとが読んだ「ゲンジモノガタリ」をどうぞ。

アーサー・ウェイリー（Arthur Waley 一八八九―一九六六）

イギリスの東洋学者。ユダヤ系の中流上層の家庭に生まれる。ケンブリッジ大学に学ぶ以前から古典語に加えて、独仏語も学び、翻訳への関心を示す。卒業後、大英博物館館員となり東洋版画素描部門で働く。白居易などを英訳した『中国詩二十首』で注目される。イギリスの外交官アーネスト・サトウが持ち帰った資料の整理をしていて「絵入り源氏物語」と出会い、翻訳を決意。江戸時代の註釈書、北村季吟「湖月抄」と本居宣長「玉の小櫛」を頼りにしたという。一九二五年に第一冊を刊行、三三年には第六巻完結。中国語も日本語も独学し、ほかにも「枕草子」「論語」「老子」「西遊記」などを訳した。一九六六年、自動車事故が遠因となりロンドン郊外で没する。晩年、極東への旅行を提案された折には、わたしが魅了された中国も日本ももはや存在しない、と言下に断ったという。作家ヴァージニア・ウルフや経済学者ケインズ、哲学者ラッセルら、いわゆるブルームズベリー・グループのひとり。

アーサー・ウェイリー　Arthur Waley

一八八九年生まれ。東洋学者。ケンブリッジ大学古典学科を卒業したのち、大英博物館の館員となる。独学で中国語と日本語を学び、白居易をはじめとする中国詩の英訳を発表して注目される。一九二五年、独力で翻訳した『源氏物語』の刊行を開始、本書はその完訳。その後『枕草子』『論語』『老子』『西遊記』などを訳して紹介した。一九六六年没。

毬矢まりえ　まりや・まりえ

俳人・評論家。アメリカ、サン・ドメニコ・スクール卒業。慶應義塾大学文学部フランス文学科卒業、同博士課程前期中退。俳人協会会員。国際俳句交流協会実行委員。『ひとつぶの宇宙』（本阿弥書店）。NHKWorld TV HaikuMasters選者。

森山恵　もりやま・めぐみ

詩人。聖心女子大学英語英文学科卒業、同大学院修了。詩集に『夢の手ざわり』『エフェメール』（ふらんす堂）、『みどりの領分』『岬ミサ曲』（思潮社）。NHKWorld TV HaikuMasters選者。

和歌表記監修：藤井貞和

源氏物語 ❶　A・ウェイリー版
The Tale of Genji

二〇一七年十二月三十一日　第一刷発行

著　者　紫式部
英　訳　アーサー・ウェイリー
日本語訳　毬矢まりえ・森山恵
発行者　小柳学
発行所　株式会社左右社
一五〇―〇〇〇二
東京都渋谷区渋谷二―七―六―五〇二
TEL〇三―三四八六―六五八三
FAX〇三―三四八六―六五八四
http://www.sayusha.com

装　幀　松田行正＋杉本聖士
印刷所　中央精版印刷株式会社

©MARIYA Marie, MORIYAMA Megumi

Printed in Japan. ISBN978-4-86528-163-7

本書のコピー・スキャン・デジタル化などの無断複製を禁じます。
乱丁・落丁のお取り替えは直接小社までお送りください。

ウェイリー版源氏物語の特徴

◉ドラマチックで心揺さぶられる源氏物語のエッセンスを凝縮
◉プリンス・ゲンジとプリンセスたち、見たことのないエキゾチックな源氏物語
◉生き生きとした会話文
◉翻訳に際して読みやすい表記で和歌の原文を併記
◉ウェイリーの付した原註も訳出
◉藤井貞和（岩波文庫『源氏物語』監修）氏による読みやすい和歌表記

百年前に英訳された「ヴィクトリアン源氏」。

エンペラーや貴族たちはパレスに住み、馬車に乗り、ワインを片手に愛の詩を取り交わします。貴婦人はロングドレスを纏い、シターンやリュートをかき鳴らし、ベッドに寝みます。イギリス、ヴィクトリア朝の貴族のようです。そして彼らの愛の世界には「千夜一夜」のイメージも重なります。

それでいて、これは紛うかたなき本格的な『源氏物語』。この雰囲気をどう伝えれば良いのでしょう。翻訳しながら私たちの脳裏には、古今東西の風物や衣装、風景などが次々と浮かび、駆け巡りました。平安の世界とともに、シェイクスピア、ディケンズ、ジェーン・オースティン、プルースト、外国文学の世界まで広がったのです。

翻訳するに当たり登場人物をカタカナ表記に、漢字にルビを振るなど、なるべくイメージが重層的に膨らむよう工夫してみました。古文、英語、現代日本語の多彩なイメージ。

千年前の物語の登場人物は、幻想的でありながら、今の私たちと同じように恋にときめき、別れに涙します。生きる喜び、悩みや哀しみも、現代の私たちとなんら変わりません。

ウェイリーの源氏物語では、個性的で魅力的な女たち、男たちが躍動し、輝き、人生の、心の深みへと誘ってくれるのです。その心理描写の凄みには目をみはるものがあります。

いつか「源氏物語」を通して読みたいと思われていた方、既に読破して新たな「源氏」に出逢いたいと思われる方、英文学をはじめ、外国文学をお好きな方、初めて海を渡った「源氏物語」に興味のある方……。このシャイニング・プリンス、ヒカル・ゲンジの新しい「源氏物語」はきっと喜んで頂けることと思います。

（翻訳：毬矢まりえ、森山恵）

「文体と文章のテンポなどに現在だからこそ可能なかたちを展開していて楽しい。」蜂飼耳さん。朝日新聞、毎日新聞など書評続々。第 2 巻は 2018 年 5 月刊行予定です［2019 年春全 4 巻完結］。

ISBN978-4-86528-163-7／定価 3,200 円＋税

左右社
〒 150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-7-6-502
電話：03-3486-6583 FAX：03-3486-6590
info@sayusha.com http://www.sayusha.com